

<エッセイ>

## 宝探しと人類学者<sup>1</sup>

深田 淳太郎\*

2010年の8月から9月、私が暮らしていたのはラバウルの町からバスで15分ほど行った海沿いにあるT村だった。2002年のはじめての調査のときから、その村の海辺で何軒かの古い貸家を営んでいるP氏の庇護の下で調査を行なっている。私が使うのはその何軒かの貸家の中でちょうどそのとき使われていない家で、行くたびに毎回違う家に暮らすことになるのだが、この年はPが住んでいる家の一部屋が空いていたので、そこに一ヶ月間住まわせてもらった。

この家には五、六脚の椅子が置かれた大きなバルコニーがあり、Pが家にいるときはなにかとお客がやって来ていた。Pは、この地区選出の国会議員A氏の地元後援会を取りしきっているので、政府の人間や関係者が諸々の相談や打ち合わせで来ることもあるし、近所の人間が特に用もなくおしゃべりしに来ていることもある。同じ敷地内の別の家に住んでいてお菓子をねだりに来る孫もいれば、中には金の無心に来る知り合いもいる。バルコニーに置かれた椅子の中のひとつに座り、そこで交わされている各種のゴシップやらの情報に耳を傾けて、なにか面白そうな話はないかと探すのは私のフィールドワークの重要な一部であった。

このP宅のバルコニーに立ち寄る客の中にTとOという二人組がいた。彼らは毎朝とは言わないまでも、かなり頻繁にやってきては、特に用事があるわけでもなくお茶を飲み、Pや私と雑談して帰っていった。二人は、Pが所有している貸家のうちの軒で生活している。といっても二人は家族ではない。Oは隣村の出身、Tはニューギニア本島のウェスタン州出身である。彼らが同じ家で寝起きを共にしているのは、その家をPから借りている男にセキュリティとして雇われているからである。セキュリティといってもまったくセキュリティらしくない二人である。体格が良いわけでもなく、特別な武器を身につけているわけでもない。穴が空いてビンロウの染みがついたTシャツに半ズボンというごく普通の格好で、そもそもセキュリティとして雇い主と一緒に行動してすらいない。

---

<sup>1</sup> 編集部には春日先生の業績を振り返る、あるいは思い出をつづったエッセイをという依頼を受けたのだが、それらは中川氏、浜田氏が春日先生の人柄やご論考に触れたエッセイを書かれている。というわけで、私は同じメラネシア地域をフィールドとしていることから、大変に刺激を受けた春日先生のヴィチ・カンバニ運動をめぐる一連の論考〔春日 2001; 2007〕を視界の端に入れつつ、自分がフィールドで見聞きしたいいくつかのカーゴカルトとも重なるような宝探しの話を書き連ねてみたいと思う。

\* 三重大学人文学部准教授



図1：P宅のバルコニー

彼らの雇い主はニューギニア本島のモロベ州出身の男性で、この年（2010年）の4月頃にニューギニア本島の第二の都市レイからやって来た。TとOは、彼と一緒にレイから来たのではなく、こちらに来てから知人の紹介でセキュリティとして雇われたのだという。しかし、TとOと最初に会った時点で、私は一度もその雇い主の男—Bという名だと後から分かった—を目にしたことがなかった。そして、結局そのときの一ヶ月の滞在では最後までBの姿を目にすることはなかった。だからTとOがセキュリティとしてBについて行動している姿を見ることがなかったのも、特に彼らがサボっていたからというわけではなかった。彼らがセキュリティとして守っていたのは人ではなく、モノだったのである。Bが貸し家に置いていった鍵のかかった大きな赤い箱。彼らはこの箱につけられたセキュリティだった。

「セキュリティだがボスはいない」とか「俺たちは箱を見張っている」という言葉の意味を最初はよく理解できなかったのだが、TとOと何度か話をしているうちにだんだんと状況が飲み込めてきた。彼らの雇い主のBは鉱山の専門家で、ラバウルに来る前はレイ<sup>2</sup>からハイランドの方に入ったある谷筋で鉱石の採掘をしていた。そこでかなり高価な宝石の原石を掘ることができたので、それを売ってお金に換えるためにレイの町に行った。しかし、レイは大変に治安が悪く、とても落ち着いて宝石の買い手を探せる環境ではない。だから治安の良いラバウルなら商売をやりやすいだろうということで渡ってきたのだという。Bはラバウルの知り合いに連絡して、その伝手でセキュリティの二人を紹介され、またPの貸家も紹介された。Pとしても、信用できる知人からの紹介だったということ、また二

<sup>2</sup> ニューギニア島北海岸に位置するパプアニューギニア第二の都市。モロベ州の州都。首都のポートモレスビーやこのレイ、そしてレイを入りにニューギニア高地地域に上がっていくハイランドハイウェイはホールドアップやラスカル（強盗）が大変に多く、治安が悪くて仕方がないということは、ほぼ常識としてラバウルでは語られる。

週間で400キナ<sup>3</sup>の家賃を前払いしたこと、さらに高価な宝石を持っているということでBを信用して家を貸したのだという。

ところが、しばらくするとBはセキュリティの二人と宝石の入った箱を残して、貸家には帰ってこなくなった。TとOによれば、Bはラバウルからバスで一時間半ほど行った山の上にあるラリムットという村に向かったという。そして、そのまま今日まで戻ってこない。Pはすでに未払いの家賃が4000キナ分もたまっているの、そろそろどうにかしないといけないと思っているようである。TとOにいたっては、最初の約束ではフォートナイトで30キナの給料をくれるという話だったのに、まだ一度も給料の支払いを受けていない。どうにか連絡をつけたいのだが、Bの携帯はつながらない。ラリムットは山奥なので携帯が通じないのだろうかなどと三人は話をしている。逃げたとしたら大問題のはずだが、しかし三人は事態をそれほど深刻に捉えているふうでもない。というのも、いざとなったら貸家に置きっぱなしにしている宝石の箱を押さえてしまえば、いくらでもお金は回収できるはずだからである。担保みたいなものだと言っているPは言う。

と同時に、セキュリティのTとOは、Bはすでに今、大金を手に入れているはずでもうすぐ戻ってくるに違いないとも言っている。「宝石が売れたの？」と尋くと、そういうわけでもないようだ。宝石の箱は鍵がかけられたまま、この貸家に置かれたままだという。そうではなく、「Bはすでにラリムットでゴールドバーを掘り当てたんだ」と二人は言う。Pに話を振ってみると、どうやらPもその話を信じているようである。「本当に？」と聞くと、「もうすでに数本見つかっているという話を聞いているから間違いない。彼は金属探知機を使うこともできる鉱山のスペシャリストだからな」とPは答えた。PとTとOは、このようにBが宝石の原石の買い手を見つけて、あるいはラリムットでゴールドバーを掘り当てて、大金を手にして戻ってくるのを待っていたのである。

ラバウルのどこかに、日本軍が戦争中に隠した金塊（ラバウルの人々はそれを「ゴールドバー」と呼んでいる）が埋まっているという噂話を耳にするのは、このときがはじめてではなかった。私が調査をはじめた2002年当初から、「どここの村ではゴールドバーが発見されたことがある」というような話はしばしば耳にしてきたし、おそらくは第二次世界大戦以降、そのような噂はずっとあり続けてきたものと思われる。そして、その物語の核心部に当たる「日本軍が隠した」という部分に関わっているために、私は幾度となくゴールドバー探しの手伝いをしてもらえないかという申し出を受けたことがある。それはたとえば次のような話である。ある日の夕方、道を歩いていると、バスを待っていた老人が私を呼び止め、周りに聞こえないように小さな声で次のような話をした。

俺のクランの山に無数にあるトンネルの中のどこかに日本軍は金塊を残してい

---

<sup>3</sup> この調査の実施時には1キナ=35円程度であった。

ったんだ。日本軍は敗戦したときに金塊を持って帰ることができずに置いていった。この話は戦争中に日本軍のドライバーをしていた爺さんから聞いたんだが、その爺さんは金塊の在処を書いてある地図を持っていた。現在は爺さんは既に死んでいて、その息子が地図を持っているはずだ。その息子が地図を見せてくれと頼んだんだが、息子は地図は確かにあったと思うがどこにあるか分からない、と言う。探してくれているとは思いますがどうも出てきそうもない。オマエは来年一度日本に帰るんだろ。その時に金塊の在処が書かれた地図を探してきてくれないか。(2003年10月9日フィールドノートより)

老人はこの話の一週間後に再び私の家を訪ねてきて「地図は見つかったか？」と聞いてきた。もちろん日本に帰ったわけではないので見つかってない。そもそも日本に帰ってもそんな地図をどうやって探したらよいか分からない。

そして、これは後から気がついたことなのだが、この時期にゴールドバーの話聞いたのにはそれなりの理由があった。2003年10月7日から連日、パプアニューギニアの全国紙ポストクーリエは、ニューアイルランド島で日本軍が隠した金塊が発見されたという噂が流れ、政府は軍隊を送ってその捜索を行なっているというニュースを大きく報じていたのである。



図2：2003年10月8日、10月10日のポストクーリエ紙の一面

全体を通して allegedly や reportedly という表現が散りばめられた、どの程度真面目に

受け取ればいいのか分かりにくい記事であるが、概ねそれらを総合すると「ニューアイルランドで 10 トン超の金塊が発見されたという。この金塊は第二次世界大戦中に日本軍が山の防空壕に隠したもので、最近までこのことは地元の長老が誰にも話さずに秘密にしていた。しかし長老が死に際してこの秘密を公開し、それを聞きつけた政府が軍隊を派遣した。政府は単なる軍事演習であると言っているが、それにだまされている人間は現地ではほとんどいない。外部からの侵入者に山中の富が奪われている様子を彼らは怒りをもって見ている<sup>4)</sup>」といったものである。興味深いのは、これらの記事で繰り返し書かれているのは、ニューアイルランドに軍隊が送り込まれたことや、記者や地元の人間も締め出されたことで、問題の核心であるはずのゴールドバーの秘密を隠していた老人の話は探し出すのが難しいほどわずかしか書かれていないことである。掘りに行く人間がいることがそこにゴールドバーがあることの真実味を作り出し、そしてそれを PNG で一番売れている新聞が報じることが自分たちの土地に隠されたなにかを予感させ、ラバウルの人々をソワソワさせている。

日本軍のゴールドバーの話が私のところに持ち込まれたのはこのときだけではない。先述のセキュリティの二人組が、彼らのボスがラリムットにゴールドバーを掘りに行っているという話をしていた場にたまたま居合わせた男性も、他の人間が帰ったあと私のところに来て、ラバウルの町にある彼の家の庭の下にどうも金塊が埋まっているようなのだという話をはじめた。

ラバウルに家を買って数年前に引っ越してきたのだが、どういうわけか敷地の中の一部の地面だけがセメントで覆われている。日本軍のゴールドバーの話は聞いたことがあったので、これは怪しいと思い、セメントを壊して、その下を調べてみた。するとセメントの下は空洞になっていて、さらにその下にも穴が続いている。掘っていくと水が出てきたが、その下にもセメントが。なんでこんな地下がセメントで覆われているのか。これはますます怪しい。絶対に日本軍がゴールドバーを隠したに違いない。掘りたいが、しかしこれ以上は掘る人間が危険なので、そこで現在は止まっている。ところで、お前はあそこにゴールドバーがあるか知っているか？（2010年9月1日フィールドノートより）

こういった話を持ち掛けられた時にいったいどう対応すべきなのか、私はいつも迷う。正直に言えば、日本軍がどこかに金塊を隠していたなんてことは、とても信じられる話で

---

<sup>4</sup> Post-Courier 紙の 2003 年 10 月 7 日 “HUNT ON FOR TEN-TON GOLD CACHE IN REMOTE PNG CAVE”、同 10 月 8 日 “PNG MILITARY DIGGING, DIVING FOR RUMORED GOLD”、同 10 月 10 日 “JOURNALISTS TURNED AWAY FROM PNG TREASURE SITE”、同 10 月 13 日 “WHAT ARE PNG SOLDIERS DOING IN NEW IRELAND?”、同 10 月 15 日 “NEW IRELAND IN UPROAR OVER GOLD HUNTERS” など。

はない。「地図を持ってきてくれたら、見つかったゴールドバーの三割はお前にやる」という申し出に心躍ることはないのだが、しかしフィールドワーカーとしては面白い方向に話が転がっていけばいいなというスケベ心に逆らうのも難しい。とはいえ、話を転がすためにあんまり乗っかってしまい、「日本人が日本軍のゴールドバー探しに本腰を入れはじめた」というメッセージとして受け取られるのもまずいだろうという（ナイーブ過ぎるかもしれない）心配もしてしまう。あんまり期待させてしまうと、しつこく来られて面倒だとも思う。

いろいろ考えながらも、私はたいてい態度の決定をあいまいに先延ばしする。一人目の老人に対しては、とりあえず「日本に帰るのは来年だから」と返事をしたが、その後彼は私の所には姿を見せていない。二人目には、とりあえず「そうなのか」といって、もしセメントに日本語が書いてあったら読んであげるからいつでも連絡をくれと携帯電話の番号を教えておいた。電話はかかってきていない。このようにラバウルのどこかに日本軍が隠したゴールドバーが埋まっているという話は、トーライの人々のあいだにうっすらと、しかし消えることなく、潜伏し続けている。その核心の真否は未決定なまま先送りされ続け、その周りで探している人間が出てくると、人々の記憶を刺激して顕在化してくる。

第二次世界大戦の際に日本軍は、当時3万人ほどの人口しかなかったガゼル半島（トーライ人の居住地）に10万人を超える兵士を送り込んだ。彼らはラバウルを中心に、各地に基地や滑走路、道路を築き、トーライの人々の生活を取り巻く景観・空間を作り替え、その多くは現在でも残されている。実際に旧ラバウル空港は日本軍が作った滑走路をそのまま使ったものであったし、現在でも使われているいくつかの幹線道路は日本軍が整備したものである。道路や空港などが外側から見える景観・地形の変化だとすると、外からは見えにくいものが連合軍の爆撃から身を隠すために掘られた防空壕、トンネルである。ガゼル半島には、総延長で100キロにも達するというほどの多くのトンネル（防空壕）が掘られている。いくつかの有名なトンネルは現在では観光スポットとして旅行者にも公開されているが、それはほんの一部に過ぎない。だいたいどの村でも、ちょっとブッシュの中に入れば無数のトンネルが残されている。またトンネルは地上だけでなく、潜水艦を隠すために海底にも掘られており、それらがどこにいくつあるのかについての正確な情報は誰も知り得ない。そう考えると、自分たちの土地に掘られたこれらの無数の穴の中のどこかに、自分たちが知らない、なにか大変なものが隠されているかもしれないと考えることは、それほど荒唐無稽な話でもないようにも思えてくる<sup>5</sup>。

---

<sup>5</sup> このラバウルのゴールドバーの噂話と比較対象となるのがフィリピンの山下財宝の話であろう。とりあえず入手することができたいくつかの日本語文献からラバウルでのゴールドバーとフィリピンの山下財宝を比較すると、単に日本軍が第二次大戦中に山の中に残していったと言われているという以上に似通っている点が多く見られる（特に入江 [1997] のルポルタージュに書かれている財宝についての会話などはラバウルでのゴールドバーについての会話とそっくりである）。だが、もちろん違いも多く存在する。なにより異なるのは、山下財宝に対しては、



図 3：観光客向けに公開されているトンネル（防空壕）

半世紀以上前に日本軍がラバウルに残していったものは道路や滑走路、金塊が隠されているかもしれないトンネルだけではない。そして、それを探し求めているのはトーライ人だけではない。日本にも「それ」を探し求めている人々があり、私は「それ」につながる重要な情報をもっている人間と目され、手伝いを依頼されたことがある。以下に引用するのは、ラバウルに「それ」を探し求めているある日本人からの私信である<sup>6</sup>。

私の父は昭和 20 年にラバウルの〇〇病院において戦死いたしました<sup>7</sup>。父が 1943 年〇月の初め戦地へ赴いたとき、私はまだ母の腹の中でその後 1 ヶ月後の 1943 年 11 月に出生、したがって父と子は対面できていなかったわけです。（中略）2000 年の秋に遺児友好巡拝に参加し、初めてラバウルを訪れ、長年の夢であった父と再会したわけですが、ラバウルでの滞在は 1 泊 2 日で初日に平和記念碑での慰霊祭とピラピラ教会への慰問で終わり、2 日目は博物館と大発洞窟・展望台への観光で

---

ラバウルでのゴールドバーとは比較にならないほどたくさん人間が真剣にコミットしており、圧倒的に当該社会において濃い、生々しい存在感をもっているという点である。またそれが現地のフィリピン人だけでなく、日本人やアメリカ人をはじめとする外国人たちも魅了しているという点でもラバウルとは異なる。笹倉 [1998] や入江 [1997] のルポルタージュからは、取材当初は懐疑的な立場を取っていた著者がそれに真剣に取り組んでいる人物と深く関わっていくにつれて、まさにその深く関わっていったということ自体によって、山下財宝の存在を少なくとも「否定することはできない」ものとして捉える他なくなっていく様子が読み取れる。

<sup>6</sup> 差出人に連絡を取れなかったため、個人を特定する情報は消した上で引用する。筆者は 2012 年からガダルカナル島の遺骨収集活動について調査をはじめたが、ラバウルに長期滞在して調査をしていたという話を関係者にすると、この手紙で書かれているような申し出は複数人から受けているので、この手紙のような遺族は決して特別な例ではない。

<sup>7</sup> 以下の私信は中略の箇所以外、すべて文章は原文のままである。

終わり何か満たされない気持ちで帰国、また機会があれば訪れたいと考えていました。それから3年後遺族会からラバウル・ブーゲンビルへの慰霊巡拝の企画があると連絡をいただき、(中略)ただ今回のラバウル行きも飛行機の都合で(ブーゲンビルへ行く)ラバウルは1泊2日、訪れた個所は前回より少なかった始末でした。

父が亡くなった〇〇病院は情報が2つあり、(中略)英語の話せない私では単独の旅行も出来ず、父が亡くなった現地へ立つ夢は果たせそうにありません。(現地のガイドはすべて英語です)そんな時あなたのエッセイを読ませていただき、治安はそれほど悪くないと事、地域にもよるのですが、少し光明が見えた思いです。近い将来私の足が健在なうちに今一度訪れてみたいのですが、お忙しい中お手数ですがご意見・情報をいただけませんか。

このメールの差出人は遺族会や戦友会の伝手から独自に情報を集め、戦時の病院の名前や軍で使われていた地図も入手して、父親の遺骨は無理にしても、最後に亡くなった場所を訪ねて慰霊したいと切望していた。その中でラバウルについての日本語での情報をネット上で探している中で私のwebページ(当時、私はwebページでフィールドワークの様子を書いた日記を公開していた。)に辿りつき、何か父親に近づくための情報を得られると思い、私にメールを送ってきたというわけである。この文章からは、差出人がラバウルのどこかに眠っている父親にどうかして会いたいと思い、様々な手を尽くして情報を入手し、実際に現地に赴いてみたが、しかしその念願には届いていないという実感が読み取れる。この申し出に対しては、もし私の滞在とタイミングがあれば出来る限りでご案内しますと返信をしたが、上手く先方の都合とは合わずに、実現はしなかった。その後、連絡は取っていないので、差出人がラバウルで念願を達することが出来たかどうかは分からない。

\*

ラバウル近郊では1955年にはじまり、特に1969年から70年代にかけて重点的な遺骨収集活動が実施されている[厚生省社会・援護局援護50年史編集委員会1997]。戦時中ラバウルに駐在していた復員者たちは、当時の地図をもとに、地権者の案内を受けて、トンネルの中や埋葬地を探索し、多くの戦友の遺骨を掘り出した<sup>8</sup>。日本人が毎年のように繰り返し自分たちの土地にやってきて、山奥のトンネルに入り地面を掘り返していくことが、戦争の記憶がより濃かった時代のラバウルの人々に一体何を想起させたのかを、前出の新聞記事と並べて想像するのは興味深いことである。

また日本人がやってくることもたらされたのは、地面の下の何かへの想像力だけでは

---

<sup>8</sup> アクセスが容易なラバウルの近郊については、ほぼ遺骨収容は済んだとみなされており、現在継続的に遺骨の捜索がなされているのはアクセス困難な山中などが中心である。

ない<sup>9</sup>。私が世話になっていた大家の P は、この遺骨収集の手伝いで、車や手伝いの人夫の手配をおこなったという<sup>10</sup>。テレビの撮影スタッフも案内して、それなりに大きな報酬を得たようである。そして、その 30 年後にやってきた日本人は家賃（それもかなりディスカウントした）を払うだけの貧乏大学院生であったが、P はそこにもなにかの可能性をおそらくは見ている。2010 年当時、P は海辺の自分の敷地にあった古い貸家を三軒解体して、そこに新たなゲストハウスを建てようと思っているのだと話していた。その場所を通るたびに P はそのことを話し、私に「日本に帰ったら政府観光局に掛け合って、観光客を日本から呼んでくれ。キャプテンエナリ的时候は、たくさんの日本人をここに泊めてもてなしたんだ」と言ってきた。私が観光客を連れてくることを本当に期待しているとはあまり思えないのだが、こういう話はとりあえずしておくものなのだ。実際この手の話はこのときだけでなく、そして P だけでなく、なにか機会があるたびに持ち掛けられて（おそらくはその場の思いつきで）、そしてすぐに忘れられる。ゴールドバーと同じような話である。

\*

セキュリティの T と O と宝石箱の話に戻ろう。彼らから B の話を聞いてから二週間ほど経ったある日、突然決着の日はやってきた。結局、どこかに埋まっているはずの日本軍のゴールドバーを掘り当てて大金を手にして帰ってくるはずの B、および良い買い手が現れてそのうちに現金に変わるはずの「宝石」は、その約束の日を最後までは待ってもらえなかったのである。

私がその日の調査を終えて三時過ぎに家に戻ってきて、家のバルコニーの椅子に腰掛けて休んでいると、警察の車が家の前に止まった。中からは三人の警察官と P が出てきた。なにごとかと P に聞いてみると、あの家賃を滞納している B の「宝石」の箱を、警察立ち会いの下に開けて検分するということらしい。ついに B のことを待ちきれなくなった P は、決着をつけるためにラバウルの警察署に乗り込んだのである。

警察官のうちの一人が、セキュリティの二人を呼びに行った数分後、彼らは「宝石」の入った箱を持って P の家にやって来た。宝石が入っているというので金属製のケースのようなものを想像していたのだが、持ってこられた箱は 30×70×25 センチほどの大きさのそれなりに頑丈そうではある赤いプラスチック樹脂製のもので、南京錠でロックされていた。本来はその箱を他人に開けられないように守っているはずのセキュリティの T と O も自分たち自身が給料をもらっていないということもあるのだろう、警察官に言われるまま

<sup>9</sup> T 村からすぐ近くにある総合病院や州のラジオ局、ラバウルの新しい空港など日本の ODA 事業で建てられている。またトーライ人の居住地域（ラバウル近辺）では 2002-04 年頃には 10 名近くの JOCV の隊員が活動しており、毎年 8 月には必ず慰霊団が訪問してきていた。

<sup>10</sup> P が口にしていた日本側のリーダー「キャプテンエナリ」は、日本側の活動記録にもたしかにそれらしき名前がある（ラバウル方面陸海軍戦友会 1971）。

に南京錠を開けた。

箱の中に入っていたのは、大小様々な大きさのいろいろな色がついた石であった。Pは「ジュン（私の呼び名）、これはホンモノの宝石か？」と尋ねてきたが、私自身、宝石の原石など見たことがない。それが宝石の原石であると言われればそうなのかもしれないと思うだろうが、しかしただの石ころだと言われても同じように納得するだろう。私は（いつもどおり）、「私には分からない」と答えた。（「本当に高価なものだったらこんなプラスチックの箱に入れて、適当に雇ったセキュリティに託して置きっぱなしにするだろうか」と思ったことはもちろん口にはしなかった。）ホンモノの宝石の原石かどうか、真贋を見分けることができないというのは、Pも、そして警察官も同じである。なにか色はついていて、単なる石ころではないような感じはするけれども、しかしそれが高価なものであるのかどうかはその場にいる誰にもよく分からないという微妙な空気が流れている。セキュリティの二人は「これをカットすると美しい宝石になるんだ」と主張してはいるが、しかし彼らはそれを掘った現場と一緒にいたわけでもないし、ラバウルに来てから雇われた人間なのでその言葉にも説得力はない。どうやらPは怒ることに決めたようである。「これは宝石なんかじゃない、騙された、あいつは嘘つきだったのだ」と声を荒らげている。



図4：Bが置いていった「宝石」

しかし当事者であるBには相変わらず連絡がとれず不在のため、とりあえずこの場ではこれ以上はなにも話を進めることができない。警察官は私がカメラを持っているのを見ると、証拠写真にするから石の写真を撮ってくれと言ってきた。断る理由も特にないので、その宝石の原石なのか何なのかよく分からない石の写真を撮った<sup>11</sup>。

その石をどうするのかについて、セキュリティの二人は「持っていってもらっては困る」

<sup>11</sup> その後、その写真のデータを警察に提出した記憶はない。

と一応の抵抗は示したが、しかし結局は警察が「証拠」として警察署の金庫で預かるという事になった。

結局、P がつけてやろうと思った「決着」は、しまい込まれていた箱を開けても、つくことがなかった。P は「それは宝石じゃない」と言っているが、少なくともその場でその真贋が鑑定されることはなかったし、誰もがP の言うことに同意しているという状況が作り出されることもなかった。それは、色がついた大きな石それ自体の佇まいによるところもあるのかもしれない。とにかく、その石に価値があるのかないのかはよく分からないまま、結論は先送りにされたのである。

途中からこの場に来て様子を見ていた、この村の前村長であるN が私に「あれは本当に宝石なのか？」と尋ねてきたので、私は「分からない。どうなんだろうな」と答えた。するとN は「あんなもの、警察が持っていったら着服するに決まっている。もう絶対に戻ってこないぞ」と言った。結局、宝石の原石はその正体が分からないまま、再び警察の金庫という「発掘」困難な場所に持ち去られてしまった。

その後、N が「今日これからププナン（埋葬儀礼）があるけど行くか？」と言うのでついて行くことにした。遺体の埋葬と共食、貝貨の分配など一連の手続きが終わって家に帰ってきたのは午後七時近くだった。夕食を食べ終えたころ、家の前に一台の車が停まった。白いランドクルーザーはこの地区選出の国会議員A 氏の車である。前述したが、P はA の地元の後援会のとりまとめをしており、私が間借りしていた家の一室はA がラバウルに戻ってきたときの居室にもなっていたのである。彼は何やらの式典出席のために、三日間ほどラバウルに戻って来たのである。P もA もおしゃべり好きなので、お茶を飲みながら真っ暗なバルコニーで雑談がはじまった。

政治の話や人のうわさ話など話題はいろいろ変わったが、少し会話が止まったときに私は昼間の話を二人に振ってみた。B の宝石の一件である。P が「あの男は嘘つきだ、あんなのは宝石じゃない」と昼間と同じ主張を繰り返し、A も「それはきっとウソだよな」と同調する。そしてB がゴールドバーを掘りに行っているというくだりを話すと、A は「馬鹿馬鹿しい。そんなもの出てくるわけないだろう、まるでカーゴカルトじゃないか。それともお前は日本軍がそんなものを埋めたって聞いたことがあるのか？本当に信じてるのか？」と完全否定した。私はそれに「それは自分には分からない」と答えを先延ばしする他なかった。

そして「そんなことよりも」と再び政治の話がはじまった。A が今考えなければならないと思っている問題は、パプアニューギニアの海底資源の問題だという。現在（2010年当時）、パプアニューギニア本島のガルフ州では天然ガス開発（LNG）が盛んに行なわれており、首都ポートモレスビーを中心にLNG 景気が盛り上がっている。実際、私が久しぶりにポートモレスビーの空港を使った際も、三つか四つだけしかない国内線のチェックインカウンターのうちの一つは「LNG 関係者専用」と書かれていたほどである。そういっ

た背景から、現在パプアニューギニアでは天然資源採掘に非常に関心が高まっている。そこで話題に上がっているのが、パプアニューギニア近海の海底資源である。現在、カナダの海底資源調査会社ノーティラス・ミネラル社が海底資源調査の許可の申請を行っており、「われわれの」海底資源をどのように管理していくべきかということが国会でも重要なトピックになっているのだという。まだ商業ベースで採掘を行っていくための技術や計画が整っていないものの、この付近の他の海域では莫大な量のレアメタルが埋蔵されているということがすでに判明しているのだという。Aは「まだ調査は行なわれていないが、ラバウルの周辺でもコバルトが出るのではないかという話を聞いている。勝手に掘られて環境が汚染されてしまっただけは大問題だし、われわれの資源をきちんとよそ者から守っていく方法を考えなければならない」と言う。ローカルな資源の利用をグローバルな資本の手を借りて有効な形で行ないながら、いかに地元の生活や権利を守るのか、そのために法律をどのように整備するべきか、オックスフォードで法学の博士号をとっているAは熱く語る。ノーティラス・ミネラル社は、海底資源調査を将来的にはパプアニューギニア人自身が実施できるように、たくさんの研修生を受け入れて教育していくというようなプランを出しているというが、それだけでは不十分だとAは考えているようである。

## 参考文献

入江有二

1995 『山下財宝：フィリピン黄金伝説を行く』 文芸春秋。

笹倉明

1998 『最後の真実：「山下財宝」その闇の奥へ』 ケイエスエス。

春日直樹

2001 『太平洋のラスプーチン：ヴィチ・カンパニ運動の歴史人類学』 世界思想社。

2007 『「遅れ」の思考—ポスト近代を生きる』 東京大学出版会。

厚生省社会・援護局援護50年史編集委員会

1997 『援護50年史』 ぎょうせい。

ラバウル方面陸海軍戦友会

1971 『南東太平洋方面戦没者遺骨収集並びに巡拝慰霊団に関する報告』